

チ  
ヤ  
イ  
ナ  
ウ  
オ  
ツ  
チ

# 矢吹晋著作選集

朝  
浩  
之  
編

①

文化大革命

②

天安門事件

③

市場經濟

④

日本-中国-米国、台湾

⑤

電腦社会主義

米知谷  
Publisher Michitani



①	978-4-89642-671-7	C0322
②	"	672-4 "
③	"	673-1 "
④	"	674-8 "
⑤	"	675-5 "

2022年9月29日  
日中国交正常化50周年  
記念出版

新年号を令和と定めた政府は『万葉集』の「梅花の歌」序が典拠だと説明した。即座に『文選』と野次が飛んだ。『紫式部日記』を読むと、一条天皇后彰子に漢籍の個人教授を務めた事実が記録されている。『源氏物語』は「長恨歌」などを換骨奪胎したもので、漢籍という骨格を抜くと、日本が世界に誇るこの物語は成立しない。ここに和魂漢才を駆使した先人たちの努力の成果を読み取れる。隣の大国と一衣帯水の島国日本が二〇〇〇年にわたって独立を堅持しえた秘密はこの巧みな和魂漢才術に隠されている。天安門事件当時、日本政府は欧米諸国の対中制裁論を排して、日中関係の発展拡大のために知恵を絞った。日本にとって、隣国の政治・経済的安定こそが国益なのだ、と説いて経済協力を継続した。これは中国経済が市場経済へ飛躍する大きな踏み台となった。今年是不幸な日中戦争に終止符を打って国交を回復して五十年となるが、両国関係は冷え冷えしたものに一変している。一部の中国崩壊論者の願いにもかかわらず、中国はますます豊かになり国防力も増大している。ここに崩壊論に代わって脅威論が登場し、今や空前の賑わいぶりだ。私は田中角栄訪中の前後からチャイナウォッチを自らの仕事としてきたが、〈変わる中国・変わらざる中国〉を複眼で観察し直すために、旧稿を再読してみた。中国という巨龍は、観察者の思惑を遙かに超え宇宙まで飛翔する。そのとき、日本は糸の切れた凧の運命を避けるために何を選ぶべきであろうか？

本年は日中国交正常化五〇周年を迎える。しかし各種世論調査による日本人の対中観、中国人の対日観をみても、日中間は良好な関係にあるとはいえない。いや五〇年を経て関係は悪化しているのではないかと危機感さえ覚える。では日本が進むべき道は？ すべては隣国との良好な関係を再構築することから始まる。そうした思いから本シリーズは企画された。

本シリーズ著者による最初期の単著「毛沢東 政治経済学を語る」、「毛沢東 社会主義建設を語る」二著は、建国以降の党内史料「毛沢東思想万歳」をいち早く紹介した書であるが、「毛沢東選集」全四巻こそ「毛沢東思想」のすべてであると錯覚し、毛沢東を論じてきた人々にとって衝撃的な書であった。食欲なまでの資料収集、徹底した資料分析によって見えない事象を可視化していく。これは以来一貫した著者の著述手法である。著者は主観性を排して事実を執着し、「中国」に埋もれることを嫌い、社会主義思想・経済、日本史、世界史と幅広い視点から、中国、日中関係を論じるチャイナウォッチャーとして第一線に立ち続けてきた。

米国と並び立つに至った中国はどこへ向かおうとしているのか。日本はどう向きあえばよいのか。対抗することを第一とするような嫌中・反中観、未だ払拭し切れないアジア蔑視観から脱することなくして回答は得られない。その点、本書は多岐にわたって示唆を与えてくれる。五〇年前と大きく変化したのは、日中間を往来する人々、在中の日本人と在日の中国人が飛躍的に増えたことである。これは現在の厳しい状況を突破する希望につながる。日中関係の最前線にいる人々、中国に関心のある人々に本書が届き、善隣友好に寄与することを願ってやまない。国交正常化の原点に立ち返り、日中共同声明（七二年）、平和友好条約（七八年）、日中共同宣言（九八年）と積み重ねてきた歴史を思い起こさなければならない。日中関係のゆくえを歴史から学ぶための必須の著作群を刊行するゆえんである。

## 文革の評価

文革はなぜ失敗したのであろうか。文革とは、何よりもまず毛沢東の煽動により、紅衛兵がまず造反し、ついで労働者たちが造反した社会的大衆運動である。ここで問題は二つの側面から考察できよう。

一つは毛沢東のイデオロギー、そして具体的な政治的指導の問題である。もう一つは、造反に決起した大衆の側の問題、すなわち擬似大衆運動の限界である。両者は毛沢東個人崇拜〔原文「個人迷信」〕を媒介として結合されていた。造反の帰結は既成秩序の崩壊であり、各種造反派は際限なく武闘を続け、ついに解放軍の介入によって辛うじて秩序を維持する形になった。

文革を「社会的進歩ではなく、内乱にすぎない」とする現在の中国当局の否定的評価（「歴史決議」）はすでに紹介した。この否定的評価は、文革を肯定的に評価することによって自らの政治的地位を保とうとする「すべて派」（原文「凡是派」、華国鋒らを指す）を打倒し政策転換を行うべく、復活した旧実権派が提起した評価であるから、そういう政治的文脈における評価であるにすぎない。「歴史決議」と銘打たれているが、過渡的な文書であることは明らかである。そのような政治的立場から独立した自由な隣国の研究者として、もう少し自主的な評価を試みたい。

## 社会主義経済の試行錯誤

一九八九年五月十五、十八日、ソ連のゴルバチョフ書記長が訪中し、三十年ぶりに中ソ和解が成立したことは文革評価に対しても考察の有力な視点を与えるものである。

鄧小平路線がかつて「修正主義的」と非難された政策よりは数倍も「修正主義的」な経済改革路線を

未知谷

チャイナウオッチ  
矢吹晋著作選集朝浩之編  
全五巻

セット

第 巻

冊

貴店名

番線・帖合

御住所

御芳名

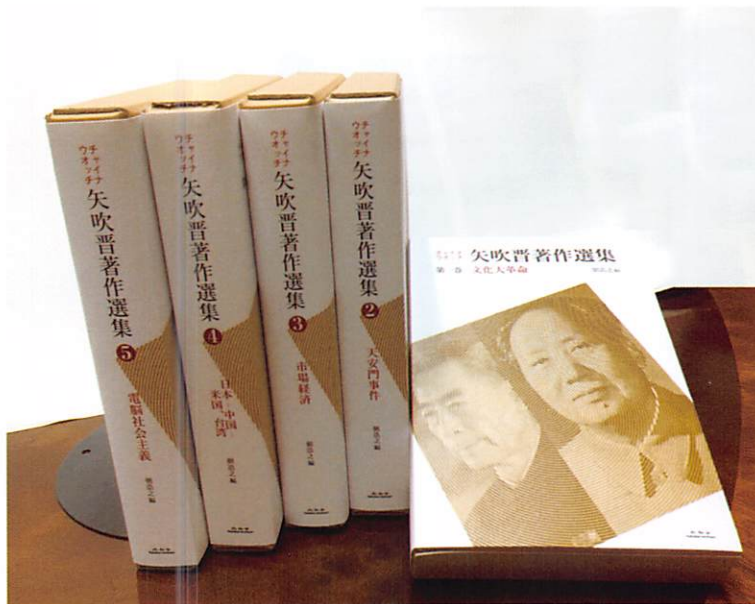
電話

未知谷

東京都千代田区神田猿樂町2-5-9

TEL.03-5281-3751

FAX.03-5281-3752



四六判並製函入 各巻平均400頁  
各巻予価本体2700円+税

矢吹 晋 YABUKI Susumu

1938年福島県郡山市生まれ。県立安積高校在席時に朝河貫一を知る。1958年東京大学教養学部に入學し、第二外国語として中国語を学ぶ。1962年東京大学経済学部卒業。東洋経済新報社記者となり、石橋湛山の警咳に接する。1967年アジア経済研究所研究員、1971～1973年シンガポール南洋大学客員研究員、香港大学客員研究員。1976年横浜市立大学助教授・教授を経て、2004年横浜市立大学名誉教授。現在、21世紀中国総研ディレクター、公益財団法人東洋文庫研究員、朝河貫一博士顕彰協会会長。

著書は単著だけでも40書を超え、共著・編著を合わせると70書をゆうに超える。ここでは本シリーズ「チャイナウオッチ」からははずれる朝河貫一の英文著作を編訳した『ボーツマスから消された男——朝河貫一の日露戦争論』（東信堂、2002年）、『入來文書』（柏書房、2005年）、『大化改新』（同上、2006年）、『朝河貫一比較封建制論集』（同上、2007年）、『中世日本の土地と社会』（同上、2015年）、『明治小史』（『横浜市立大学論叢』、2019年）の6書、朝河を主題とする『朝河貫一とその時代』（花伝社、2007年）、『日本の発見——朝河貫一と歴史学』（同上、2008年）、『天皇制と日本史——朝河貫一から学ぶ』（集広舎、2021年）の3書を挙げておきたい。

朝 浩之 Asa Hiroyuki

1951年富山県生まれ、早稲田大学政治経済学部中退。元東方書店取締役、現在フリーランス編集者。論稿に「私にとつての文革」（『文化大革命を問い直す』勉誠出版、2016年、所収）ほか、『読書人』『週刊金曜日』などに書評執筆。